

千葉県八千代市

# 小板橋遺跡

- b地点埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成19年度

中島土地建物株式会社  
八千代市遺跡調査会

千葉県八千代市

# こ い た ば し 小 板 橋 遺 跡

-b地点埋蔵文化財発掘調査報告書-



平成19年度

中島土地建物株式会社  
八千代市遺跡調査会

## 例　　言

- 1 本書は、中島土地建物株式会社による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県八千代市大和田字中畑ヶ165-1ほかに所在する小板橋遺跡(遺跡番号八千代市245)のb地点である。
- 3 発掘調査から報告書作成にいたる業務は中島土地建物株式会社の委託を受け、八千代市遺跡調査会が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、下記の期間に実施した。

確認調査 昭和59年8月20日～昭和59年8月29日 八千代市教育委員会

本調査 昭和59年9月5日～昭和59年10月31日 八千代市遺跡調査会 担当 嶽成美

整理作業 平成19年8月1日～平成20年3月31日 八千代市遺跡調査会

- 5 整理作業は、実測・トレース等を秋山利光・植田正子・立松紀代美、遺物の写真撮影を高屋麻里子が行った。また、本書の執筆・編集は秋山が行った。

地形図は原図を縮小した図面をスキャナで取り込み、コンピューター上で描画ソフトにより作図したもの用いている。また、遺物の写真は整理時にポジフィルム及びデジタルの両方で撮影しているが、本書の図版はデジタルデータを用いて作成している。

- 6 本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面、写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000「佐倉」(平成10年発行)

第2図 大日本帝国陸地測量部発行 1/20,000「下志津原」(明治36年測図・明治43年発行)

第3図 八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図No19・No24(平成13年修正)

をそれぞれ、加筆・修正あるいは縮小して使用している。

- 8 本書の遺構実測図における用例は、以下のとおりである。

(1)図面の方位は、すべて磁北である。

(2)遺構図面の縮尺は基本的に竪穴住居跡を1/80、土坑・カマド・炉・貯蔵穴などを1/40とした。

(3)遺構図中の一点鎖線は人為的な硬化範囲、破線は推定復元線を示す。記号等は図中に凡例を示した。

- 9 本書の遺物実測図における用例は、以下のとおりである。

(1)図面の縮尺は基本的に以下のとおりとした。縮尺が複数ある場合は図中に記載した。

土器実測図 1/4 土器拓影図・土製品実測図 1/3 石器・石製品実測図1/1～1/4

鉄器・鉄製品実測図 1/2～1/4

(2)出土遺物は挿図番号で表示しているが、遺物検索等の利便性のため整理ナンバーを観察表の中に記した。また、測定値の( )は復元推定値を表し、〈 〉は現存値を表している。

- 10 発掘調査から本書の刊行に至るまで、以下の諸機関・諸氏にご指導、ご協力いただきました。記して感謝の意を表します。(敬称略)

## 目 次

### 例 言

### 目 次 本文目次・挿図目次・図版目次

第Ⅰ章 遺跡と調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と概要	1
第3節 周辺の遺跡	3
第4節 確認調査の概要	5
第5節 本調査の概要	7
第Ⅱ章 遺構と遺物	10
第1節 竪穴住居跡(1号住居跡・2号住居跡)	10
第2節 土坑(1号土坑・2号土坑・3号土坑・4号土坑)	18
第3節 グリッド出土遺物	21
第Ⅲ章 まとめ	24
報告書抄録	卷末

## 挿 図 目 次

第1図 小板橋遺跡と周辺遺跡	2	第2図 小板橋遺跡の周辺地形	3
第3図 小板橋遺跡と調査地点	4	第4図 確認調査トレンチと検出遺構	5
第5図 調査区の土層	6	第6図 本調査区域遺構検出状況	8
第7図 1号住居跡	10	第8図 1号住居跡カマド	11
第9図 1号住居跡炉	11	第10図 1号住居跡貯蔵穴	12
第11図 1号住居跡遺物出土状況	12	第12図 1号住居跡出土遺物(1)	13
第13図 1号住居跡出土遺物(2)	14	第14図 2号住居跡	16
第15図 2号住居跡炉	16	第16図 2号住居跡貯蔵穴	16
第17図 2号住居跡遺物出土状況と出土遺物	17	第18図 1号土坑	18
第19図 2号土坑	19	第20図 3号土坑	20
第21図 4号土坑	20	第22図 土師器グリッド出土状況	21
第23図 グリッド出土遺物	22		

## 図 版 目 次

図版1 調査前状況・調査状況・遺構検出状況	図版2 1号住居跡・1号住居跡出土遺物(1)
図版3 1号住居跡出土遺物(2)・2号住居跡	図版4 土坑・出土遺物・グリッド出土遺物

# 第Ⅰ章 遺跡と調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

昭和58年12月23日、中島土地建物株式会社から八千代市大和田字中畑ヶ165-1他の区域4,954m<sup>2</sup>に宅地造成を目的とした「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。当該地の「照会」は昭和56年10月に別事業者が一部相違する区域でなされており、すでに「土師器散布地」として回答されていた。しかし、この開発事業は実施されずに至っていた。

今回の照会を受けた八千代市教育委員会は再度現地踏査を行い、現況が荒蕪地及び畠地であり、土師器がわずかに散布していることを確認した。そして、隣接区域で昭和55年7月21日から同年8月13日まで5,379.55m<sup>2</sup>の範囲で本調査が実施され、古墳時代中期・後期の遺構が検出されており、遺跡の範囲は今回の照会地にまで広がることが想定された。また、当該地が周知の遺跡の範囲内であり、市教委は翌昭和59年1月14日付けで千葉県教育委員会にこれらの意見を付して報告した。同年3月15日、照会地の全域について県教委から埋蔵文化財が所在するとの回答があり、照会者に伝達した。

昭和59年8月1日、宅地造成の事業主体 中島土地建物株式会社から当初の照会区域の一部を除き、3,400m<sup>2</sup>に変更した開発区域で、文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届が提出された。事業者との協議により、昭和55年の調査で記録保存が完了している一部区域を除き、発掘調査による記録保存することとなった。また、確認調査において事業者が作業員等の提供をすることで準備がすすめられ、市教委は文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘通知書を県教委に提出した。準備の整った同年8月20日確認調査を開始した。

今回報告する当該調査は当初、小板橋遺跡第2次調査と呼称されていた。その後、本市では遺跡名称と地点名称との基準が精査され、「第2次調査」(注1)との呼称は正確でないと判断し、今回の調査区域を小板橋遺跡b地点と呼称することで統一した。

## 第2節 遺跡の立地と概要

八千代市は千葉県北西部に位置する。千葉市の中心部まで約13キロメートル、都心までは約30キロメートルの距離にあり、昭和42年の市制施行以来、首都圏のベッドタウンとして発展してきた。

小板橋遺跡は八千代市南部、新川の西岸の大和田に所在する。

新川は長沼一帯を源に持ち、印旛沼水系に属する。流れは北あるいは北西に流下し、宇那谷・勝田を経て大和田付近で勝田川から新川と名前を変える。現在、大和田付近では江戸時代から開削が行われてきた堀割りが分水界を越えて、東京湾に流れ込む花見川につながっているが、新川は本来さらに北に流れ、桑の川と合流し平戸付近で流れが東に変わり神崎川と共に印旛沼に流れ込んでいる。

本跡は成田街道(現国道296号線)南側の新川に向かって幅広く開く台地上、下総下位面に立地している。(第2図)

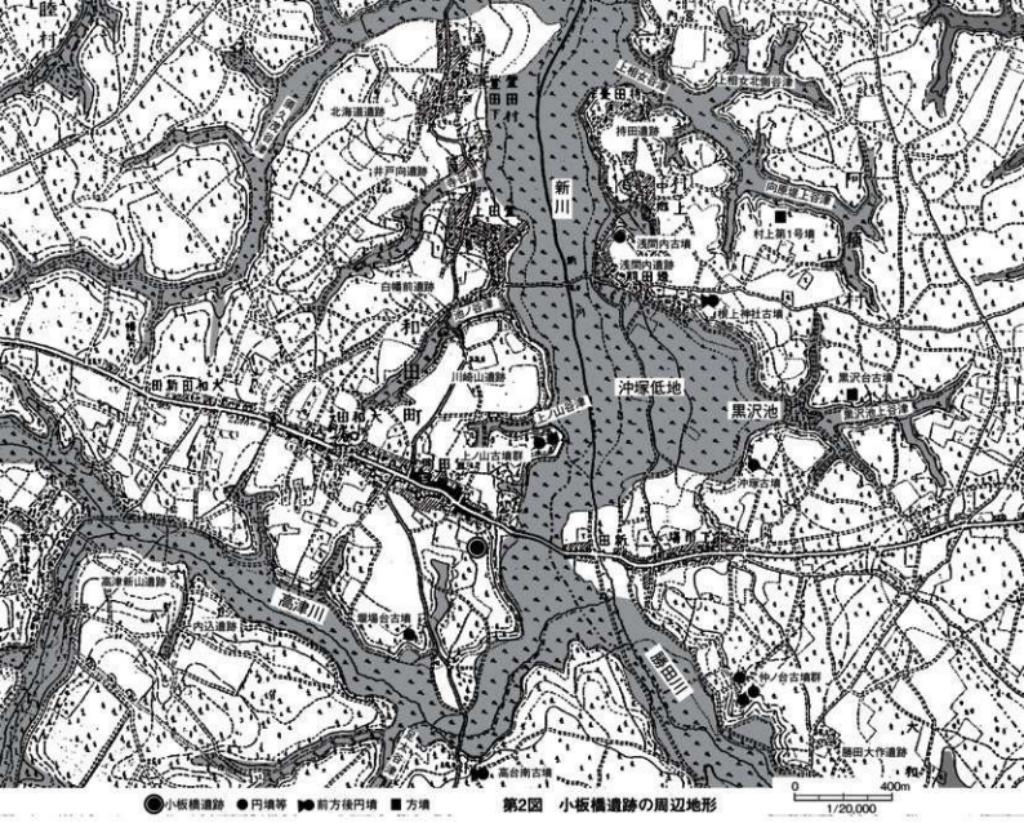
地形的には調査区の中央部に南側の大和田から谷津が深く入り込んでおり、複雑な形状を呈している。東西方向の土層図でみると、J13地点の地表面の標高が242m、T28地点で228mとなり、東の新川側に向かって徐々に傾斜した地形であることを示している。



第1図 小板橋遺跡と周辺遺跡

0 1km 2km  
1/50,000

1. 内野第1遺跡 2. 藤田大作遺跡 3. 浅間内遺跡 4. 持田遺跡 5. 村上宮内遺跡 6. 西山遺跡 7. 堂の上遺跡 8. 下高野新山遺跡 9. 南谷遺跡 10. おおびた遺跡 11. 雷道跡  
 12. 上谷道跡 13. 大山道跡 14. 果谷道跡 15. 向境道跡 16. 境原道跡 17. 内込道跡 18. 高津新山道跡 19. 岩崎山道跡 20. 白轡前道跡 21. 井戸向道跡 22. 北海道道跡  
 23. 推進後道跡 ワサル山道跡 24. 香地ノ台道跡 25. 花丸道跡 26. 桑納道跡 27. 桑納新山道跡 28. 作ヶツヨ道跡 29. 白郷道跡 30. 烏田込の内道跡 31. 間見穴道跡  
 32. 道地道跡 33. 長原道跡 34. 東山久保道跡 35. 真木野山山道跡 36. 佐山台道跡 37. 田原山道跡 38. 子の神台道跡 39. 紗妙神道跡 40. 上座矢備道跡 41. 神奈場道跡  
 42. 西ノ台道跡 43. 先崎西原道跡 44. 岩戸広谷道跡 45. 草場道跡 46. 馬ヶ台道跡 47. 仲内道跡 48. 松崎北・V道跡 49. 長崎II道跡 50. 船尾城 51. 向ノ地道路  
 52. 船尾町田道跡 53. 船岡白幡道跡 54. 鳴神山道跡 55. 向新田道跡 56. 北の台道跡 57. 谷田木本道地道跡 58. 小室台道跡 59. 神ヶ道跡 61. 仲山古墳群 62. 高台南古墳  
 63. 墓場台古墳 64. 上ノ山古墳 65. 沖塚古墳 66. 黒沢台古墳 67. 横上神社古墳 68. 村上第一号墳 69. 浅間内古墳 70. 萝地の台古墳 71. 桑納古墳群 72. 大東台古墳  
 73. 萝地古墳群 74. 豊富原古墳群 75. 間見穴古墳群 76. 平子台古墳群 77. 真木野古墳 78. 佐山台古墳 79. 田原山古墳群 80. 神妙芝山古墳群 81. 梁谷古墳  
 82. おおびた古墳群 83. 南谷古墳 84. 下高野新山古墳 85. 先崎宮ノ越1号墳 86. 先崎作花1号墳 87. 先崎高塚1号墳 88. 井野松山1号墳 89. 天狗谷墳群・魚屋古墳群  
 90. 西ノ原古墳群 91. 仲内古墳 92. 木戸口古墳 93. 本戸口古墳 94. 新板下古墳 95. 東光院古墳 96. 船尾町田道跡内古墳 97. 北ノ内古墳

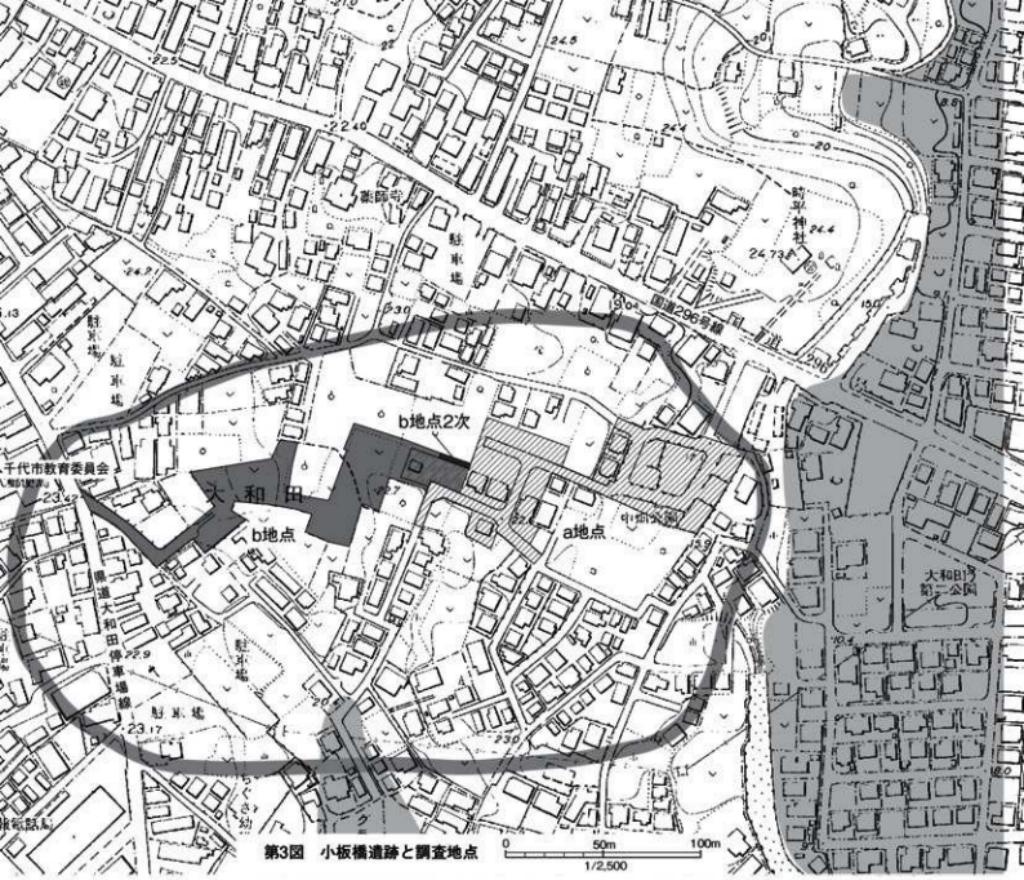


第2図 小板橋遺跡の周辺地形

### 第3節 周辺の遺跡

本跡で検出された遺構・遺物は古墳時代中期～後期の時期が主体であるため、ここでは古墳時代を中心とする周辺の遺跡について概観する。とりわけ、周辺の石製模造品の製作跡について細述する。

本跡の周辺地域での古墳時代の集落は、同じ新川流域では沖塚低地の西岸に弥生時代後期から古墳時代前期・中期・後期とほぼ連続的に営まれた川崎山遺跡(19)が所在している。この遺跡の調査では中期の石製模造品製作跡が4軒検出されている。池ノ谷津をはさんだ北側の台地全体に展開している白幡前遺跡(20)では、5軒の後期の竪穴住居跡がまばらに検出されている。これらの住居跡は北側の寺谷津側に面している。さらに、この寺谷津の北側に位置する舌状台地は新川に向かって大きく延びており、井戸向遺跡(21)・北海道遺跡(22)が立地している。井戸向遺跡では前期と後期の集落が検出されている。北海道遺跡では中期と後期の集落が検出されている。北海道遺跡の中期の集落は23軒ほどの竪穴住居跡が検出されているが、そのうちの半数以上、12軒の住居跡。後期では7軒の住居跡のうち1軒が石製模造品の製作跡であることが確認されている。これらの製作跡は台地の北側を開析する須久茂谷津に面する低台地の斜面に展開している。さらに、この谷津の北側の台地上には権現後遺跡・ヲサル山遺跡(23)が所在しており、弥生時代後期から古墳時代前期・中期・後期の集落が連続的に営まれている。これらの遺跡で中期の竪穴住居跡は5軒検出されているが、須久茂谷津に面する台地上に3軒確認され、この3軒の住居跡は石製模造品の製作跡で



第3図 小板橋遺跡と調査地点

0 50m 100m  
1/2,500

第1表 小板橋遺跡周辺の古墳時代の遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺跡No.	古墳時代住居跡			調査年	周辺遺跡の参考文献
				前期	中期	後期		
1	内野第1遺跡	千葉市花見川区宇都原町	千葉市	○	○		H1~H8	1, 31
2	勝田大字遺跡	八千代市勝田字大作	254	○		○	S60	2
3	浅間内遺跡	八千代市村上字浅間内	204	○		○	H6~H16	3, 4
4	持田遺跡	八千代市村上字持田	200			○	H5, H6	5
5	西山遺跡	八千代市村上字西山	196	○			H1, H2	6
6	堂の上遺跡	八千代市村上字堂の上	219		○		H14~H15	7
7	下高野新山遺跡	八千代市下高野字新山	92			○	S61, S63, H1, H6	
8	南谷遺跡	八千代市保品字南谷	270	○			H6, H10	8
9	おおひた遺跡	八千代市保品字大庭	86	○	○		S48	9
10	雷道遺跡	八千代市水本字雷	106			○	H4, H5	12
11	上谷遺跡	八千代市保品字上谷	77		○		H4~H10	10, 11
12	栗谷遺跡	八千代市保品字栗谷	75	○	○		S63~H6	12, 13
13	向塙遺跡	八千代市神野字向塙	98		○		H2~H8	15
14	境塙遺跡	八千代市神野字境塙	73	○		○	H4~H10	14
15	内込遺跡	八千代市八千代台北字内込	246		○		H13, H14	16, 17
16	高津新山遺跡	八千代市高津字坂込	239			○	S60~H1	18
17	川崎山遺跡	八千代市菅原町字川崎山	241		○	○	S54~H18	19, 20, 21, 22
18	白幡遺跡	八千代市菅原字白幡前	185			○	S54~S63	23
19	井戸向遺跡	八千代市菅原字井戸向	284	○		○	S53~H13	24, 25
20	北海道遺跡	八千代市ゆりのき台5, 6丁目他	183		○	○	S54~S58	25, 26
21	ヲサル山遺跡	八千代市ゆりのき台7丁目他	283	○		○	S56~S59	27
22	梅堤後遺跡	八千代市ゆりのき台7, 8丁目他	171	○	○	○	S52~S57, H7	25, 28
23	菅原ノ台遺跡	八千代市菅原字菅原ノ台	179	○	○		S63~H15	6, 29, 30



第4図 確認調査トレンチと検出遺構

あった。残りの2軒は新川方面の菅地ノ台遺跡との境界に位置しており、このうちの1軒は同様に製作跡である。道路をはさんで新川に面する区域を菅地ノ台遺跡(24)として区分しているが、古墳時代中期の集落が現後遺跡に接して検出されており、そのうちの1軒から滑石製の剣形模造品や有孔円板の製品・未製品などが複数出土している。

新川の対岸、沖塚低地の北側には浅間内遺跡(3)が所在する。弥生時代後期から古墳時代前期・中期・後期と連続的に営まれていた。本跡南側で新川と合流する高津川流域では、内込遺跡(17)と高津新山遺跡(18)が隣接して所在している。内込遺跡では中期から後期の集落が検出されており、高津新山遺跡では前期・後期の集落の展開が確認されている。新川の上流、勝田川流域には古墳時代前期・後期の集落である勝田大作遺跡(2)が立地する。さらにその上流には内野第1遺跡(1)が所在し、古墳時代前期の大規模な集落や中期の集落、また、16基の古墳などが検出されている。

新川の東側、高野川流域の上高野で堂の上遺跡(7)が調査され、弥生時代後期・古墳時代前期・中期・後期の集落が確認されている。この内、中期の住居跡から滑石製模造品や製作中の破片など多数検出されており、石製模造品の製作跡とみられている。

#### 第4節 確認調査の概要

##### 調査の経過

準備の整った昭和59年8月20日からトレンチの掘削を開始し、同年8月28日に終了した。

##### 日記抄

昭和59年8月13・14日(月・火) 現地にて打合せ、草刈を一部実施。

8月20日(月) 器材搬入。本日から作業開始。草刈を実施。

8月21日(火) 杭打ち作業によりグリッド設定。現況写真の撮影。トレンチの掘削を開始。

8月22日(水) グリッド設定継続。トレンチ掘削継続。

- 8月23日(木) グリッド設定続。トレンチ掘削継続。調査区域西側の状況写真撮影。  
K25グリッドから土坑、J24グリッドから住居跡を検出。
- 8月24日(金) グリッド設定続。トレンチ掘削継続。各グリッドから住居跡や溝状遺構を検出。
- 8月25日(土) トレンチ掘削継続。新たなグリッド設定。J13グリッドから住居跡を検出。
- 8月27日(月) 検出遺構の精査。A29グリッドで住居跡を確認。J24グリッドで住居跡と土坑を確認。
- 8月28日(火) トレンチ内の検出遺構の精査。本日で確認調査を完了。

### 調査の方法

調査区域内の位置を特定するため、調査区全体に対し5m方眼のグリッドを組むこととした。しかし、開発区域が東西方向に複雑に細長いため、調査区全体に正確なグリッドを設定する必要から、グリッドの起点は開発区域東側の境界杭を基準点としているが、東西方向にできるだけ長くグリッドが組める任意な方位で基準線を設けた。

杭の名称は南北方向にアルファベットを用い、東西方向にはアラビア数字により表示した。グリッド名稱はグリッド北西隅の杭名称をもって表示した。

調査面積は全体の状況を把握するため、調査対象面積の10%を目標に、2m×4mの短いトレンチを規則的に配置することを当初の基本とした。

確認調査でのトレンチは拡張したものも含めて、48ヶ所を調査した。掘削面積は394m<sup>2</sup>となり、調査対象面積に対して11.6%を調査したこととなった。

### 遺構確認面と土層

遺構の確認面はソフトロームが調査区域全体に明瞭に検出されていることもあり、このソフトローム上面をもって検出することとした。

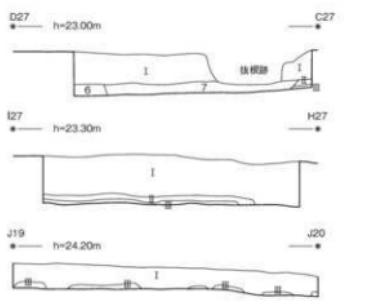
土層は調査区が東西方向に細長いことを考慮し、南北・東西方向の2方向とした。南北方向は27の杭ライン、東西方向はJの杭ラインの土層を観察し、実測図をもって記録した。

第Ⅰ層は暗褐色土を主体とする表土層である。

第Ⅱ層は暗黒褐色土層で粒子細かく、ローム粒子を点々と含む。

第Ⅲ層はソフトローム層の漸移層である。

第2節で前述したとおり、東側に傾斜する地形をしており、表土層の深さも、J13地点では30cmであり、T28地点では80cmと深さを増していく傾向がみられた。



第5図 調査区の土層

### 確認調査の成果

確認調査の成果は古墳時代の堅穴住居跡が4軒のほか、土坑4基、溝状遺構を4条検出した。

出土遺物は古墳時代の土師器を中心に出土してい

る。時期としては、古墳時代中期・後期が想定された。また、それ以外の遺物はほとんどみられず、特に縄文土器や弥生土器の出土は全く確認できなかった。

## 第5節 本調査の概要

### 調査区域

事業者との協議の結果、遺構が検出した区域を記録保存することになった。確認調査により得られた成果から、堅穴住居跡や土坑、溝状遺構が調査対象とされた。

### 調査の方法

堅穴住居跡等の調査のための表土剥ぎは現場への進入経路が狭隘であったこと、周辺に住宅地が迫っていることなどから、人力により行った。最終的に確認調査により検出された住居跡等の遺構周辺1,536mの表土剥ぎを行った。

堅穴住居跡が想定される遺構については、ナンバーと住居跡名を用いて表記することとした。調査は十字に土層観察用のベルトを残し、サブトレント掘削後に全体を掘削した。遺物はできる限り出土した地点に残し、位置と深さを測定した後に取り上げることとした。微細な遺物については位置等を測定せず一括で取り上げているものもある。確認調査で用いたグリッドラインから1m方眼を現場に組み、平面位置の測定を行った。水準については、当開発事業のため事前に測量された地形測量図に記載された標高の明らかな境界杭から新たにベンチマーク(BM)を設定して、水準測量を行った。

土坑の調査も基本的に住居跡の調査と同様とした。名称は住居跡と同様に順次表示したが、当初付与した3号土坑は最終的に遺構とは判断されなかったため、基本整理時に5号土坑を3号土坑に名称を変更した。本報告はそれに従った。溝状遺構の調査については必要により遺構内部の調査を行うこととした。

### 調査の経過

本調査は、事業者の開発工事の日程を考慮し、調査準備は十分に整っていなかったが昭和59年9月5日に開始した。堅穴住居跡の検出された区域の表土剥ぎから開始し、堅穴住居跡の調査及び土坑の調査を行った。同年10月31日すべての調査を完了し、現地を撤収した。

### 日記抄

- 昭和59年9月5日(水) 調査区域内の石の撤去など環境整備、器材搬入。K15グリッド周辺の表土剥ぎ。
- 9月6日(木) K15グリッド周辺の表土剥ぎ継続。当初住居跡を想定していたが、溝状遺構であった。  
この溝の覆土はふかふかで、比較的新しいものと判断された。
- 9月7日(金) J25グリッド・C29グリッド・A28グリッド周辺の3ヶ所で表土剥ぎ開始。確認面まで1mほどあり作業が進捗せず。
- 9月10日(月) A28グリッド周辺では表土剥ぎ完了。A29グリッドでカマド検出。1号住居跡とする。J25グリッド周辺の住居跡を2号住居跡とする。27グリッドラインを土層観察するためのトレント掘削開始。
- 9月12日(水) J25グリッド周辺表土剥ぎ継続。2号住居跡は一部区域外に出ていた。
- 9月18日(火) 1号住居跡のプラン確認作業。2号住居跡のトレント掘削作業開始。

- 9月20日(木) ベンチマークの移動。1号住居跡のプラン精査。2号住居跡の全体掘削作業開始。
- 9月22日(土) II9グリッドの遺構精査。1号住居跡のトレンチ掘削作業開始。2号住居跡のベルト撤去。貯蔵穴などの内部調査開始。
- 9月25日(火) 1号住居跡のトレンチ掘削作業継続。2号住居跡の炉の調査、完掘。
- 9月27日(木) 1号住居跡の遺物出土状況実測継続。2号住居跡の床面精査。1号土坑半截開始。
- 10月5日(金) 2号住居跡の平面実測。1号土坑エレベ実測。2号土坑掘削作業開始。I24グリッド周辺表土

第2表 小板橋遺跡b 地点 検出遺構一覧表

遺構名称	略称	種別	位 置 (x:東西y:南北)	規 模 (m)			平面形態	主軸方位	カマド・炉	時代・時期	備考
				主軸	副軸	深さ					
1号住居跡	01D	竪穴住居跡	A 26 - A 29 (4.4)	3.63	4.5	0.3	鶴嘴長方形	N- 55° -W	炉3・カマド1	古墳時代・後期	石製模造品製作跡
2号住居跡	02D	竪穴住居跡	J 24 - K 24 (4.4)	3.72	0.3	—	長方形	N- 64° -W	炉	古墳時代・後期	—
1号土坑	01P	土坑	K 25	1.4	1.4	0.16	円形	—	—	—	—
2号土坑	02P	土坑	J 26 - K 26	4.04	2.4	0.12	不整形	—	—	—	小ピット19
3号土坑	03P	土坑	I 20 - J 20	2.7	1.98	2.0	長椭円形	—	—	—	フランコ状
4号土坑	04P	土坑	I 26	1.95	1.02	0.4	不整形	—	—	—	底に方形

\* 住居跡の主軸はカマドを通る軸又は炉を通る長軸とし、規模は相対する各壁の中点を結んだ線上の壁間を計測し、主軸の方位は磁北からの角度とした。



第6図 本調査区域遺構検査状況

- 剥ぎ完了。
- 10月13日(土) 28ライントレント掘削。2号住居跡の平面実測完了。Jラインの土層実測。表土剥ぎ。
- 10月15日(月) 1号住居跡の床面ピット掘削。新たな2号土坑半裁開始。
- 10月16日(火) 1号住居跡の床面ピット掘削。2号住居跡完掘写真。3、4号土坑半裁開始。
- 10月24日(水) 1号住居跡の平面実測完了。カマド調査。2、3号土坑調査。4号土坑調査。5号土坑調査。  
28ライントレント掘削継続。
- 10月26日(金) 1号住居跡のカマド調査。4号土坑調査。5号土坑調査。28ライントレント掘削継続。
- 10月31日(水) 全景写真撮影。1号住居跡、2号住居跡写真撮影。2、5号土坑写真。調査完了

(注1) 今回の地点の調査後、隣接地(第3図 b地点2次調査区)の照会が昭和61年4月8日付けで提出された。照会地のすぐ脇で住居跡が検出されていることもあり、埋蔵文化財が所在すると判断された。事業者より土木工事の届が提出され、同年8月11日、発掘調査が実施された。1.5m×1.5m程の小トレントを4ヵ所掘削した。遺物は土器類が少量出土したが、遺構は全く検出されなかつたため、正確な箇面等の記録は不要と判断され、そのまま完了とした。この地点の調査をb地点2次調査と呼称している。

#### 参考文献

- (財)千葉県文化財調査協会 2001 「千葉市内野第1道路発掘調査報告書」第Ⅲ分冊
- 八千代市道路調査会 2007 「千葉県八千代市 藤田大作道路 -埋蔵文化財発掘調査報告書-」
- 八千代市教育委員会 2003 「千葉県八千代市浅間内道路発掘調査報告書-平成14年度」
- 八千代市教育委員会 2007 「千葉県八千代市浅間内道路発掘調査報告書」第2次本調査・第3次本調査
- 八千代市教育委員会 1995 「平成6年度・八千代市埋蔵文化財調査年報」
- 八千代市教育委員会 1990 「千葉県八千代市内道路群発掘調査報告 平成元年度」
- 7 (財)千葉県文化財センター 2002~2004 「千葉県文化財センター年報 №26~№28 -平成12年度~平成14年度-」
- 八千代市教育委員会 1996 「八千代市埋蔵文化財調査年報 -平成元年度-」
- 9 おおひがし道路調査会 1975 「おおひがし道路 -八千代市少年の自然の家建設地内道路-」
- 10 八千代市道路調査会 2001~2005 「千葉県八千代市上谷道路 (仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第1分冊~第5分冊
- 11 八千代市道路調査会 2005 「千葉県八千代市上谷道路 (仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」第1分冊本文編
- 12 八千代市道路調査会 2004 「千葉県八千代市栗谷道路・役山東道路・雷南道路・雷道路(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」第3分冊
- 13 八千代市道路調査会 2001~2003 「千葉県八千代市栗谷道路 (仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第1分冊・第2分冊
- 14 八千代市道路調査会 2004 「千葉県八千代市境川道路 (仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」
- 15 八千代市道路調査会 2004 「千葉県八千代市境川道路 (仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」
- 16 八千代市道路調査会 2001 「千葉県八千代市内込道路発掘調査報告書 -宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-」
- 17 八千代市道路調査会 2003 「千葉県八千代市内込道路・北点穴発掘調査報告書 -宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-」
- 18 八千代市教育委員会 1982~1984 「千葉県八千代市高津崎山道路」・II・III・昭和56年度~昭和58年度確認調査の概要-」
- 19 八千代市道路調査会 1980 「荒田町崎山道路発掘調査報告書 1979」八千代市都市計画街路3、4、1号線建設工事に伴う発掘調査報告書
- 20 八千代市道路調査会 1999 「千葉県八千代市川崎山道路 -埋蔵文化財発掘調査報告書-」
- 21 八千代市道路調査会 2003 「千葉県八千代市川崎山道路 d地点-荒田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書-」
- 22 八千代市道路調査会 2004 「千葉県八千代市川崎山道路b地点発掘調査報告書 -店铺建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書-」
- 23 (財)千葉県文化財センター 1991 「八千代市白樺前道路 -雪田地区埋蔵文化財調査報告書V-」
- 24 (財)千葉県文化財センター 1987 「八千代市井ノ口道路 -雪田地区埋蔵文化財調査報告書V-」
- 25 (財)千葉県文化財センター 1993 「八千代市椎原後道路 -北浦道道路 -芦戸井ノ口道路 -雪田地区埋蔵文化財調査報告書VI-」
- 26 (財)千葉県文化財センター 1988 「八千代市北浦道道路 -雪田地区埋蔵文化財調査報告書VI-」
- 27 (財)千葉県文化財センター 1986 「八千代市サツ山道路 -雪田地区埋蔵文化財調査報告書VII-」
- 28 (財)千葉県文化財センター 1984 「八千代市椎原後道路 -雪田地区埋蔵文化財調査報告書I-」
- 29 八千代市教育委員会 1988 「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和62年度」
- 30 八千代市教育委員会 1989 「千葉県八千代市内道路群発掘調査報告 昭和63年度」
- 31 齋藤達文 2003 「内野第1道路」「千葉縣の歴史 資料編 古2」(財)千葉県史料研究財團

## 第Ⅱ章 遺構と遺物

本調査で検出された遺構は最終的に古墳時代の竪穴住居跡が2軒、土坑が4基、溝状遺構が1条であった。確認調査において住居跡4軒、土坑4基、溝状遺構4条が検出されていたが、遺構周辺の表土剥ぎを進めることで確認をした結果、遺構と確定できたのは上記のとおりとなった。

J13グリッド周辺で検出されていた落ち込みは覆土がふかふかな溝となり、比較的新しいものと判断された。また、C27グリッド周辺で検出されていた溝状遺構は表土剥ぎが最終段階までずれ込んだため、形状の確認にとどまった。溝の覆土(第5図 調査区の土層 D27-C27土層参照)は暗褐色土が主体でローム粒子を多く混入し、粘性・しまりが強かった。古い時期の可能性があった。

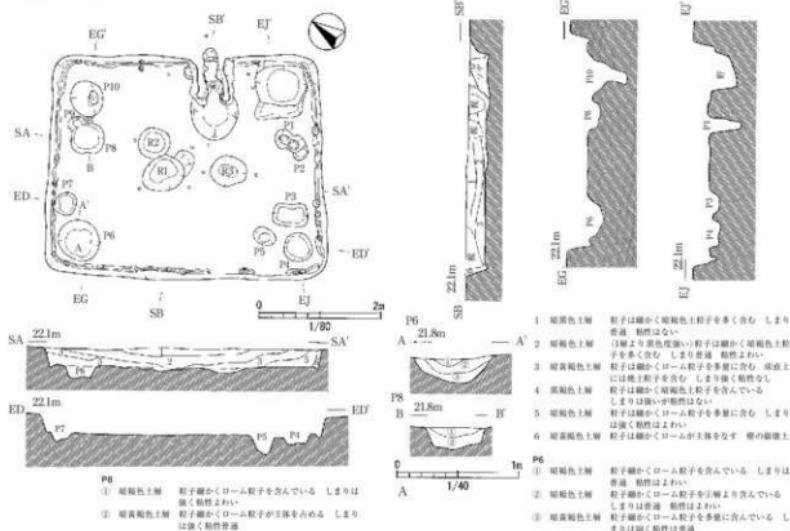
遺物では遺跡の主体となる古墳時代の土師器が最も多く、須恵器をわずかに伴っている。その他には近世・近代の陶磁器・すり鉢などが出土しているが、縄文土器と弥生土器は全く確認できなかった。

### 第1節 竪穴住居跡

調査区の東側で2軒の竪穴住居跡が検出されている。この2軒の住居跡は近接していないが、東西に細長い調査区からすると東側に偏り、a地点に接するように検出されている。

#### 1号住居跡(第7~13図・図版2、3)

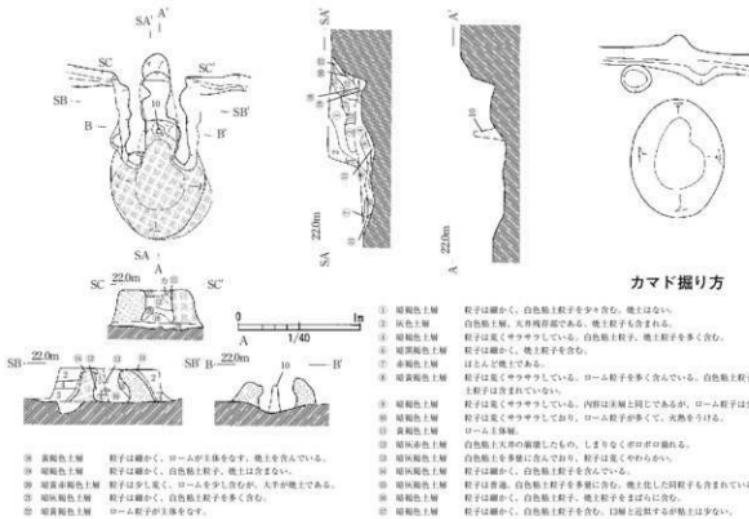
本跡は調査区の最東端に位置している。a地点との境界に接しており、a地点の集落との連続性や一体性を伺わせる。



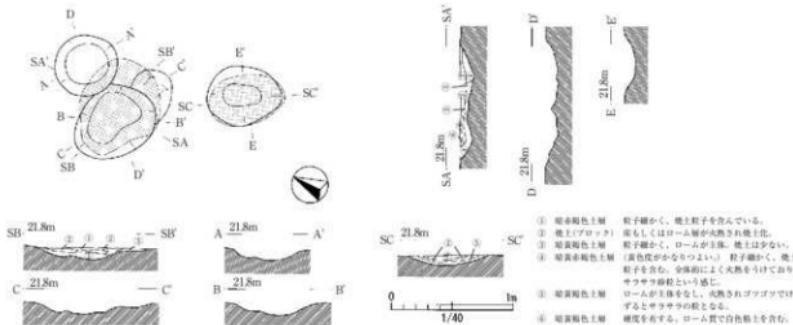
第7図 1号住居跡

第3表 1号住居跡

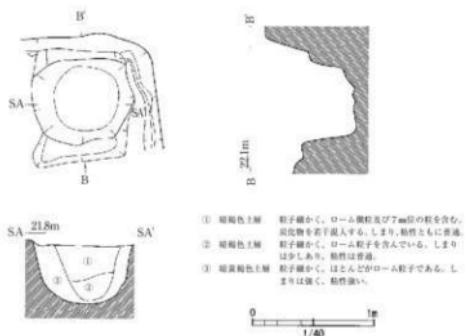
種出位置	A2B・29グリッド		主軸×短軸×深さ (m)			( ) は推定値
	住居跡形状	周円長方形	3.63	4.50	0.3	
表軸方位	N-55°-W					
縦×横×深 (cm)						縦×横×深 (cm)
Ip1 (R1)	位置 中央	72 (57)	—	カマド	北東壁中央やや東より	155 78 —
Sp2 (R2)	位置 中央やや北側	53 50	—	床礎化粧	なし	— — —
Ip3 (R3)	位置 中央西側り	65 50	—	前掘穴	東隅 形状周円長方形	68 86 50
P1	—	32 (32)	54	P6	—	72 66 28
P2	—	30 (34)	56	P7	—	38 36 14
P3	—	60 38	20	P8	—	50 56 20
P4	—	50 50	20	P9	—	30 (26) —
P5	—	40 28	34	P10	—	61 55 66



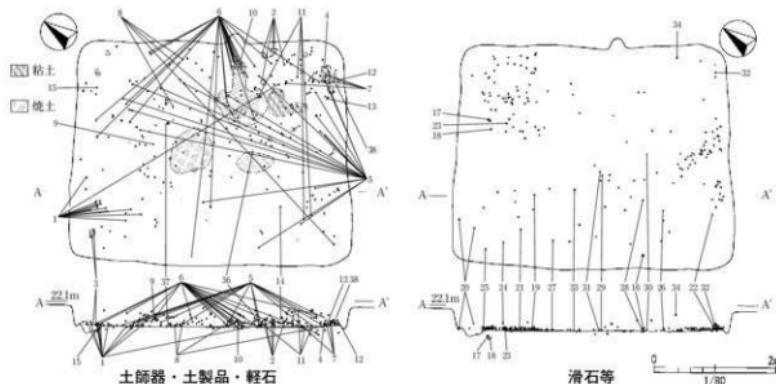
第8図 1号住居跡 カマド



### 第9図 1号住居跡炉



第10図 1号住居跡貯蔵穴

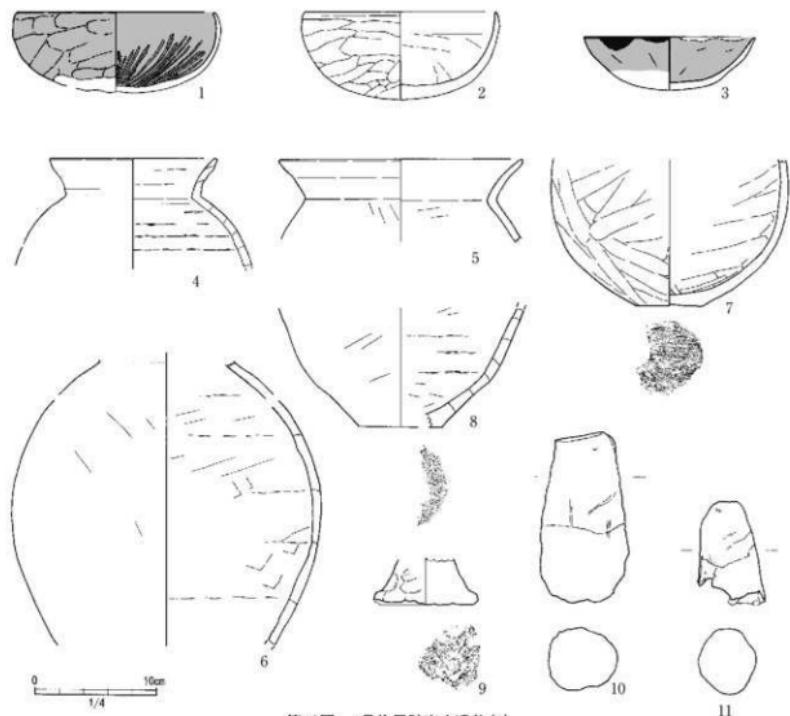


第11図 1号住居跡遺物出土状況

この住居跡の覆土は擾乱を多く受けているが、基本的には自然埋没とみられる。住居跡の構造は、主柱穴が確認されていない点とカマドと炉が共に付設されていることが特徴的であった。床面からピットは10基検出されているが、主柱穴と判断できるものはなく、壁寄りに設置されているものが多い。

カマドは長方形を呈する住居跡の長辺にあたる北東壁に設置されている。位置は壁の中央ではなく、やや東寄りに片寄って設置されていた。調査後、袖などの構築物を撤去するとピットと周溝の続きが検出された。住居の構築当初にはカマドは設置されておらず、後に周溝などを埋め戻しカマドを構築したものと推定された。カマドの構造は壁面の上端をわずかに削り通路としている。白色粘土で構築した袖は壁面から80cmほど伸びし、その前面に約80cm×100cmの火床が形成されている。火床の端、カマド内部の中央に支脚(第12図10)が直立したまま残っていた。

炉は3ヶ所確認されている。それぞれ同時存在の可能性もあるが、わずかに切り合い関係がみられ、RI



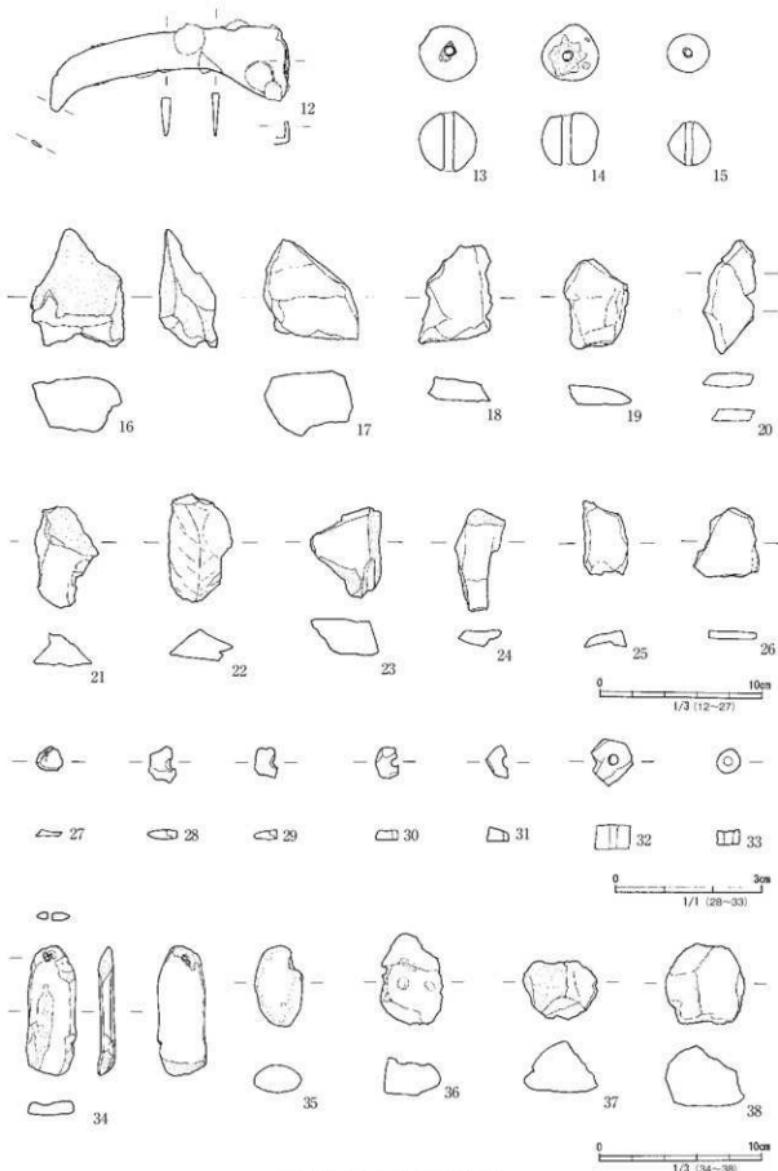
第12図 1号住居跡出土遺物(1)

→R2という経過が推定できる。R3は当初検出されていなかった。周辺の床面の精査を繰り返すうちに検出されているところからみて、最も古期の可能性もある。これらの炉の調査時に白色粘土を多く含んだローム土に覆われていたことが確認されている。炉の使用を終了した後にロームにより埋め戻し、床を貼り床状に形成したものと推定された。

住居跡の覆土中から出土した遺物は一括で取り上げた微細な遺物も含め約570点を数えた。内訳は土師器268点、滑石製模造品及び滑石片238点、軽石15点、鉄器1点、土玉3点、支脚や粘土塊などの土製品36点、陶磁器類1点であった。

滑石片の内訳は碎片が215点、剥片11点、石核あるいは残核とみられる破片が11点、それよりも大きく母岩状のもの2点、作製途上にある粗削した状態のもの1点、白玉の穿孔途中で破損してしまったもの4点、その他白玉の製作途上にある未製品4点、(ほぼ白玉の完成品とみられるもの1点であった。ほとんどが白玉に関する破片であった。それ以外に、石斧に似た形状であるが滑石製の種別不明としたもの(第13図34)が1点出土している。

これら滑石製の破片等の出土状況はほとんどが床面直上からの出土であり、住居跡の使用時の状況をそ



第13図 1号住居跡出土遺物(2)

第4表 1号住居跡出土遺物観察表

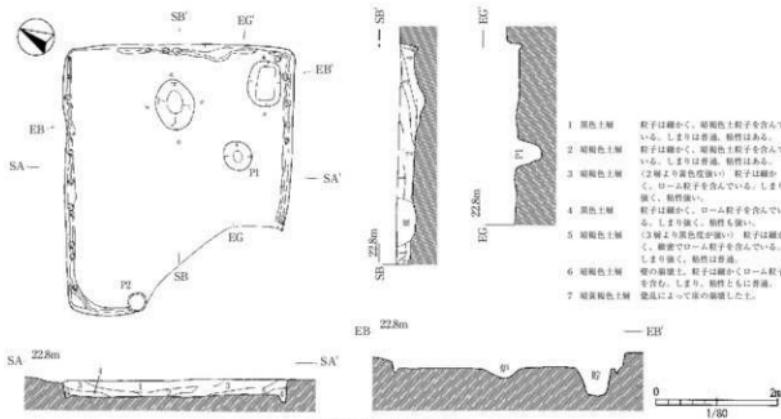
No.	器種	計測値(cm)	器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	( ) 復元値 ( ) 現存値		整理No.
						備考	出土状況	
1	土師器 壺	口径 (16.0) 底径 — 高さ 6.5 最大径 17.0	口径 1/2欠損・口縁は内凹 底部上位に最大径を持 つ。底部は丸みをもつ る。	外縁の付部から底部に横柱 のへタクズリをそのまま持 つ。口縁内に横柱テ 内 底付部整修後、底部から 腹部付近まで丸くする。	胎土・少 外縁付部少 し、口縁内に横柱テ 内 底付部整修後、底部から 腹部付近まで丸くする。	底部を斜く外面と内 面全体に赤彩	西隅 一帯 床面	0111
		口径 15.4 底径 —上端に最大径を持 つ。底部は丸みをもつ る。	外縁の付部から底部に横柱 のへタクズリをそのまま持 つ。口縁内に横柱テ 内 底付部整修後、底部から 腹部付近まで丸くする。	底部を斜くやや多 外に少い青緑 10YR7/3 し、口縁内に横柱テ 内 底付部整修後、底部から 腹部付近まで丸くする。	底部を斜く外面と内 面全体に赤彩	北東壁際 カマド脇 下層		
		高さ 7.2 最大径 16.2	—	—	—	—	—	
3	土師器 壺	口径 (14.0) 底径 — 高さ 4.4 最大径 —	口径 丸みをもつ底部から 一部が大きく開く。口縁 もそのまま開く	底部裏面に内ラヌ。口縁 内に横柱ナデ 内面はヘラ ナデ	白色砂利粉 多 白陶他中小砂粒 多 外に少い青緑 10R6/6 底付部内に横柱テ 内 底付部整修後、底部から 腹部付近まで丸くする。	底部を斜く外面と内 面全体に赤彩	西隅 床面	0113
		口径 (12.2) 底径 — 高さ (8.9) 最大径 (19.4)	口縁部は外反し、錐脚 で底面し、胴部中に 最大径がある。胴下部 は又鉗	口縁部内外ヨコナデ。胴部は 表面が荒れていて不明。錐 脚内にはケシリ、輪縞みが 残る	白色砂利粉 やや多 外に少い青緑 2.5YR6/4 外付部少 底付部内に横柱テ 内 底付部整修後、底部から 腹部付近まで丸くする。	底部を斜く外面と内 面全体に赤彩	東隅 床面	
		口径 (20.0) 底径 — 高さ (6.8) 最大径 —	口縁部の一部のみ残存 口縁部は外反し、錐 脚で底面する。錐脚は 錐脚やからむらら 創大 半平付	口縁部内外ヨコナデ。胴部へ 外に横柱ナデ 脇縞みが 残る	白色砂利粉 やや多 外付部少 底付部内に横柱テ 内 底付部整修後、底部から 腹部付近まで丸くする。	底部を斜く外面と内 面全体に赤彩	東隅 床面	
6	土師器 壺	口径 — 底径 — 高さ (23.3) 最大径 (25.4)	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド内部主体、 カマド前面 床面主体	0104
		口径 — 底径 — 高さ (23.3) 最大径 (25.4)	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド内部主体、 カマド前面 床面主体	
		口径 — 底径 — 高さ (23.3) 最大径 (25.4)	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド内部主体、 カマド前面 床面主体	
7	土師器 壺	口径 — 底径 5.4 高さ (23.3) 最大径 (25.4)	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	0107
		口径 — 底径 — 高さ (23.3) 最大径 (25.4)	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
		口径 — 底径 — 高さ (23.3) 最大径 (25.4)	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
8	土師器 壺	口径 — 底径 — 高さ (9.8) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	0110
		口径 — 底径 — 高さ (9.8) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
		口径 — 底径 — 高さ (9.8) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
9	土製品 支脚	口径 — 底径 — 高さ (3.8) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	0120
		口径 — 底径 — 高さ (3.8) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
		口径 — 底径 — 高さ (3.8) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
10	土製品 支脚	口径 — 底径 — 高さ (14.1) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	0117
		口径 — 底径 — 高さ (14.1) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
		口径 — 底径 — 高さ (14.1) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
11	土製品 支脚	口径 — 底径 — 高さ (8.5) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	0118
		口径 — 底径 — 高さ (8.5) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
		口径 — 底径 — 高さ (8.5) 最大径 —	— — —	— — —	— — —	— — —	カマド周辺主体、 カマド前面 床面	
12	鉢器 錐	口径 14.6cm 底 —	高 4.4cm 厚 0.4~0.5cm	胎 胎 胎	重量 49.4g 重 重 重	胎 胎 胎	東隅 下層	0121
13	土製品 土玉 錐	口径 3.5cm 底 —	高 3.6cm 厚 6.0mm	胎 胎	重量 36.7g 重 重	胎 胎	東隅 床面	0115
14	土製品 土玉 錐	口径 3.4cm 底 —	高 3.2cm 厚 5.5mm	胎 胎	重量 38.2g 重 重	胎 胎	東隅 中層	0114
15	土製品 土玉 錐	口径 — 底 2.6cm	高 2.7cm 厚 4.5mm	胎 胎	重量 14.4g 重 重	胎 胎	北西隅 ピット内	0116
16	石 刃	口径 7.2cm 底 —	高 7.2cm 厚 3.1cm	胎 胎	重量 127.6g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0122
17	石 刃	口径 6.2cm 底 —	高 6.2cm 厚 5.4cm	胎 胎	重量 196.6g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0123
18	石 刃	口径 6.1cm 底 —	高 6.1cm 厚 4.5cm	胎 胎	重量 45.7g 重 重	胎 胎	北西隅 ピット内	0124
19	石 刃	口径 5.5cm 底 —	高 5.5cm 厚 4.9cm	胎 胎	重量 29.7g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0125
20	石 刃	口径 7.0cm 底 —	高 7.0cm 厚 3.1cm	胎 胎	重量 23.8g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0126
21	石 刃	口径 6.2cm 底 —	高 6.2cm 厚 3.7cm	胎 胎	重量 38.5g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0127
22	石 刃	口径 7.7cm 底 —	高 7.7cm 厚 3.9cm	胎 胎	重量 43.5g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0128
23	石 刃	口径 5.6cm 底 —	高 5.6cm 厚 4.2cm	胎 胎	重量 48.7g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0129
24	石 刃	口径 6.2cm 底 —	高 6.2cm 厚 2.7cm	胎 胎	重量 23.6g 重 重	胎 胎	北西隅 下層	0130
25	石 刃	口径 4.6cm 底 —	高 4.6cm 厚 2.7cm	胎 胎	重量 12.1g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0131
26	石 刃	口径 4.2cm 底 —	高 4.2cm 厚 4.0cm	胎 胎	重量 11.0g 重 重	胎 胎	北西隅 床面	0132
27	石 刃	口径 1.5cm 底 —	高 1.5cm 厚 0.4cm	胎 胎	重量 1.4g 重 重	胎 胎	南東隅 切削痕	0133
28	石製品 破砕品	口径 0.7cm 底 —	高 0.6cm 厚 0.2cm	胎 胎	重量 — g (計測不確) 重 重	胎 胎	南東隅 下層破砕	0134
29	石製品 破砕品	口径 0.6cm 底 —	高 0.4cm 厚 0.2cm	胎 胎	重量 — g (計測不確) 重 重	胎 胎	南東隅 中層	0135
30	石製品 破砕品	口径 0.6cm 底 —	高 0.5cm 厚 0.2cm	胎 胎	重量 — g (計測不確) 重 重	胎 胎	南東隅 中層	0136
31	石製品 破砕品	口径 0.7cm 底 —	高 0.7cm 厚 0.4cm	胎 胎	重量 — g (計測不確) 重 重	胎 胎	南東隅 中層	0137
32	石製品 破砕品	製作中	口径 1.0cm 底 —	高 0.9cm 厚 0.5cm	重量 0.5g 重 重	胎 胎	南東隅 破砕痕	0138
33	石製品 玉	口径 0.5cm 底 —	高 0.45cm 厚 0.3cm	胎 胎	重量 0.1g 重 重	胎 胎	南東隅 破砕痕	0139
34	石製品 石片状	口径 — 底 —	高 2.9cm 厚 0.8cm	胎 胎	重量 39.6g 重 重	胎 胎	全般研磨痕	0140
35	石	— —	— —	— —	重量 4.5g 重 重	—	P8・9内一括	0141
36	石	— —	— —	— —	重量 13.3g 重 重	—	中央 中層	0142
37	石	— —	— —	— —	重量 14.4g 重 重	—	火熱を受ける 中央 床面	0143
38	石	— —	— —	— —	重量 21.2g 重 重	—	火熱を受ける 東隅 下層	0144

のまま残しているとみられた。平面的には大きく二つのブロックが想定できる。ひとつは南東壁側中央のP1、P2とP3との間にあり、もうひとつは北隅際のP10周辺にみられた。その他一括で検出したものも多く、P6内から6点、炉内から15点出土していた。これらの石材はほとんどが滑石であったが、中には10点ほど雲母片岩とみられるものも含まれている。

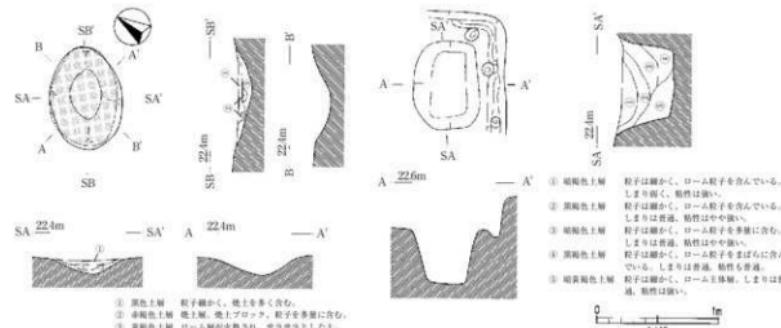
遺物以外には、焼土ブロックが3ヶ所検出されている。住居跡中央に検出されているが、大きなものはカマド前面と炉周辺からであった。また、粘土ブロックも数ヶ所検出している。最大のブロックは東隅の貯蔵穴の縁辺からであった。その他のブロックは小さなものであるが、北東壁側一帯から検出されている。

## 2号住居跡(第14~17図・図版3)

本跡は調査区の東側に位置しているが、調査区域の不規則性もありa地点との連続性は不明である。

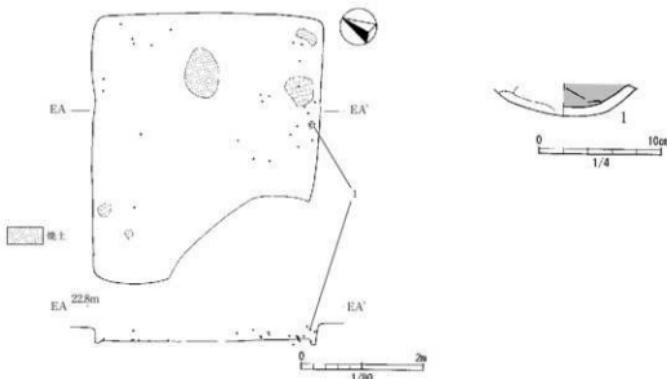


第14図 2号住居跡



第15図 2号住居跡炉

第16図 2号住居跡貯蔵穴



第17図 2号住居跡遺物出土状況と出土遺物

第5表 2号住居跡

検出位置	J24-K24	主軸×短軸×深さ(cm)		
		長方形	(4.40)	3.72
長軸方位	N-64°-W			
P1	位置 中央	84	64	—
P1	—	50	46	42
P2	—	32	32	—

No.	器種	計測値(cm)	器形の特徴	整形・調整の特徴	施土・色調・焼成	幅×横×深(cm)		
						( )復元値	( )現存値	
1	土師器 壺	口径 — 底径 — 器高 (2.7) 最大径 —	1/2欠損 底部は丸 みをもつ 器高 (2.7) 整形	体部内面から底部に横 位のヘラケツリをそ のまま残す 内面にはナデ 良好	細粒 少 外)暗赤褐 5YR3/2 (内)赤い縁 5YR7/4	内面に赤彩痕が残る。	南東壁側 中層	0201

第6表 2号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	器形の特徴	整形・調整の特徴	施土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 壺	口径 — 底径 — 器高 (2.7) 最大径 —	1/2欠損 底部は丸 みをもつ 器高 (2.7) 整形	体部内面から底部に横 位のヘラケツリをそ のまま残す 内面にはナデ 良好	細粒 少 外)暗赤褐 5YR3/2 (内)赤い縁 5YR7/4	内面に赤彩痕が残る。	南東壁側 中層	0201

しかし、さらに西側に広がる調査区域から住居跡は検出されておらず、集落の内で最西端に位置する可能性もある。住居跡の西隅の一部は調査区域の境界から外に出ていたため、調査ができなかった。

調査区西端のJ13地点と東端のJ28地点との地表面での比高差は約1.4mあり、表土層の厚さでは約30cmから約80cmと厚くなる傾向がみられた。本跡周辺のJ24地点でも確認面まで約70cmほどの深さがあり、遺構検出面まで深い地点であった。住居跡の覆土は約30cmほどしかなかったが、自然埋没と推定された。

住居跡の構造では主柱穴が検出されていない。これは1号住居跡の構造と同様であった。床面からピットが3ヶ所検出されているが、西隅に長方形状の貯蔵穴と南東壁側中央のP1と南西壁際のP2であった。これらは位置等から通常の主柱穴と判断できるものではなかったが、P1については上屋構造を支えるための柱である可能性はあるだろう。周溝は断続的ではあるがほぼ全周している。また、壁際には周溝の内外に小ピットが数多く検出されている。

遺物の出土数は全体的にまばらで少なかった。総数30点ほどであり、その内土師器26点、鉄片2点、石2点であった。また、鉄片2点の内1点は炉の覆土中から出土している。いずれも種別は不明である。炉以外に焼土ブロックが壁際に大小4ヶ所ほど検出されている。

## 第2節 土坑

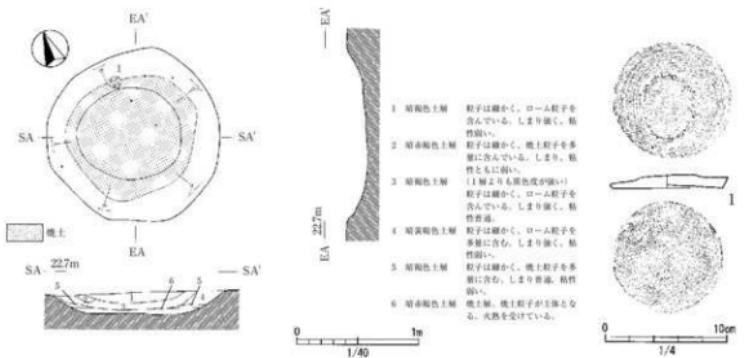
b地点で検出された土坑は4基であった。特にまとまりなどは確認できないが、調査区全体の検出状況からみると、住居跡の検出状況と同様に調査区の東側半分から検出されている。

### 1号土坑(第18図、図版4)

調査区東側、K25グリッドに位置している。2号住居跡の南東に隣接して検出されている。

形状は直径が1.4m程の円形の土坑である。確認面からの土坑の深さは16cmほどであった。覆土は自然埋没が想定される。土坑の底面から焼土層が厚みと広がりをもって検出されている。

出土遺物は土器類が6点出土している。いずれも土器類の小破片であった。1は土坑の下層で出土しているが、焼土層(6層)上面からの出土であった。



第18図 1号土坑

第7表 1号土坑出土遺物観察表

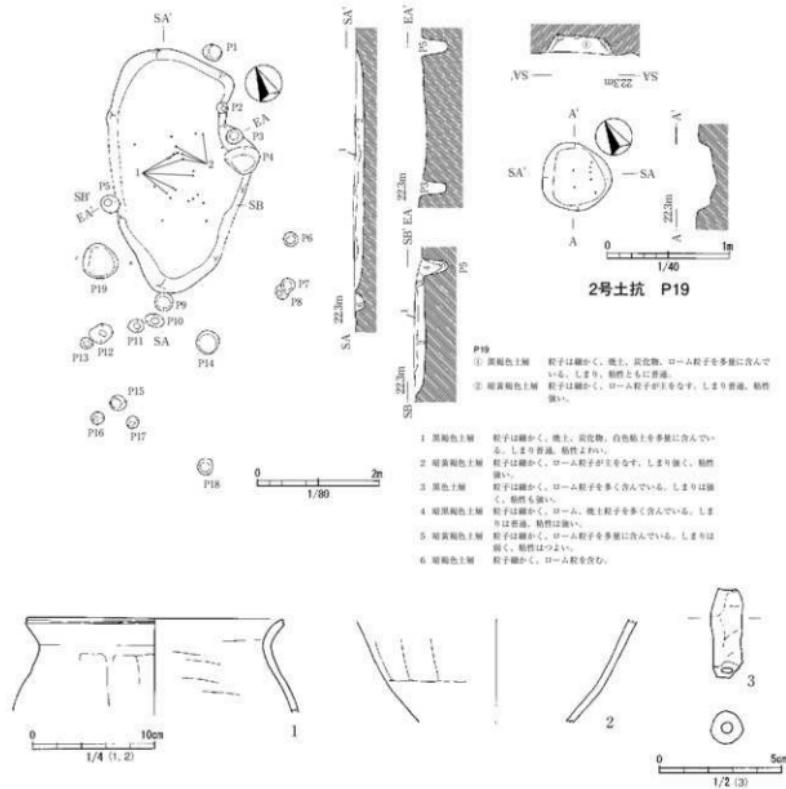
No.	器種	計測値(cm)	器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	( )復元値	( )現存値
							口径	底径
1	土器類 甕底部	— 9.0	窓部の一部	外表面にはヘラケズリ 上側にも下側にも回転 糸引き痕が残る	細砂粒 上:明赤褐 下:灰褐色	北側 焼土層上面	2.5YR5/6 2.5YR7/4	P101
	器高 (1.1)	—			良好			
	最大径	—						

### 2号土坑(第19図、図版4)

位置は調査区東側J26・K26グリッド周辺から検出されている。2号住居跡の東側8mほどのところに位置している。

形状は4.04m×2.4mの不整形であった。土坑の深さは12cmと浅く、土坑の南側一帯に広く、小ビットが19ヶ所検出されている。これら的小ビットには特段の規則性はみられない。ビットの規模は、P2、P3などのように径10cmほどの小さなものから、P4、P19などのような径が28cm～30cmほどの大きさのものまで検出されている。小さなビットが多い。

覆土は遺構の深さが浅いこともあり、はっきりとはしないが自然埋没が想定される。遺構調査時に覆土中から多量の粘土の混入が確認されており、土層観察でも上層から白色粘土が確認されている。



第19図 2号土坑

第8表 2号土坑出土遺物観察表

No	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	( )復元値 ( )現存値
1	土師器 甕	口径 (21.0)	口縁から腹部までの 1/3程度は縫合部や 側面に彎曲し、口縁以外 は直線的である。	口縁内外に横ナギ で施されている。	砂粒少 外)褐灰 7.5VR4/1 内)灰褐 7.5VR4/2 良好		2号土坑主体部中央	P201
		底径 (7.6)						
		高さ (8.2)						
		最大径 —						
2	土師器 甕	—	腹部の下半の1/2程度 は直線的である。	存在する腹部の上位に複 数のヘラケズリ、下位に 複数のヘラケズリ、内面 にはヘラナデ	砂粒多 外)褐 2.5YR6/6 内)赤 7.5YR6/3 良好		2号土坑主体部中央	P202
3	土製品 土錘	往 1.3×1.2cm 長 <3.6cm>	孔径 5.0mm	重量 5.2g			P2内一括	P203

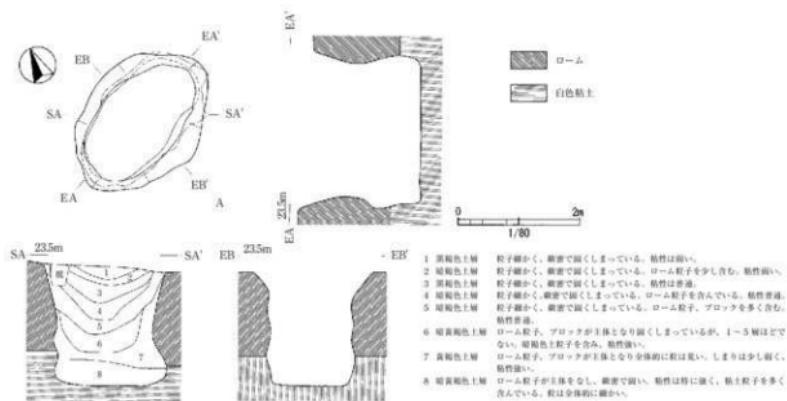
出土遺物は34点出土している。内訳は土師器31点、支脚片らしき粘土塊1点、土錘(第19図3)1点、石が1点であった。1と2は主体となる土坑の中心部からまとめて出土していた。相互に出土土地点が重なり同一個体の可能性もある。3の土錘はP2内から出土していた。

## 3号土坑(第20図、図版4)

調査区中央、I20・J20グリッド周辺に位置している。

平面の形状は長軸が2.7m、短軸1.98mの楕円形の土坑である。確認面からの深さは約2mもあり、土坑の下部では粘土層を掘り込んでいた。断面の形状は袋状を呈しており、土坑の下部ではオーバーハングしている。意図的なしっかりとした掘り込みであり、確かな目的があることが伺われる。

覆土は自然埋没が想定される。出土遺物は全くみられなかった。



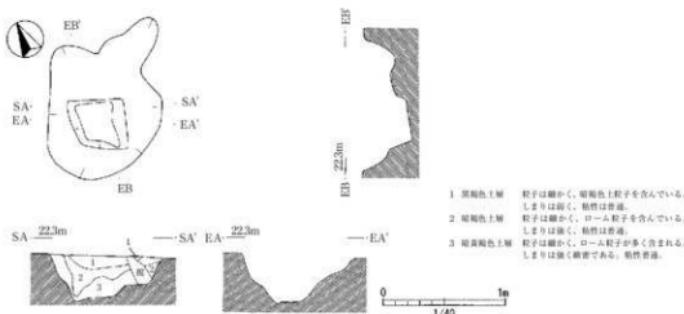
第20図 3号土坑

## 4号土坑(第21図、図版4)

調査区東側、I26グリッドに位置している。2号住居跡の東側に10mのところで検出されている。

上面の形状は1.95m×1.02mの不整形の土坑である。土坑の下部では確認面と違って、一辺40cmの四角形を呈している。確認面からの深さは40cmほどであった。上部は搅乱を受けていると判断された。

覆土は自然埋没が想定される。出土遺物はない。



第21図 4号土坑

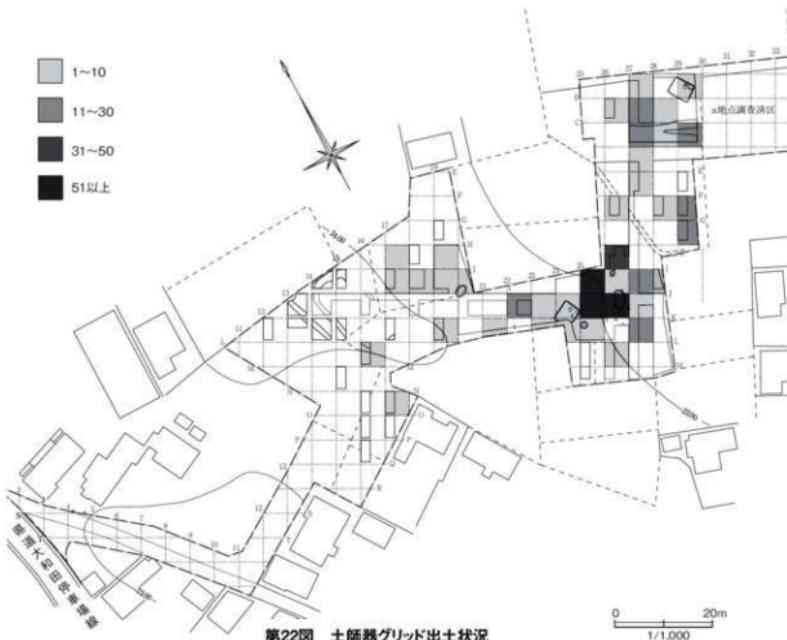
## 第3節 グリッド出土遺物(第22・23図・図版4)

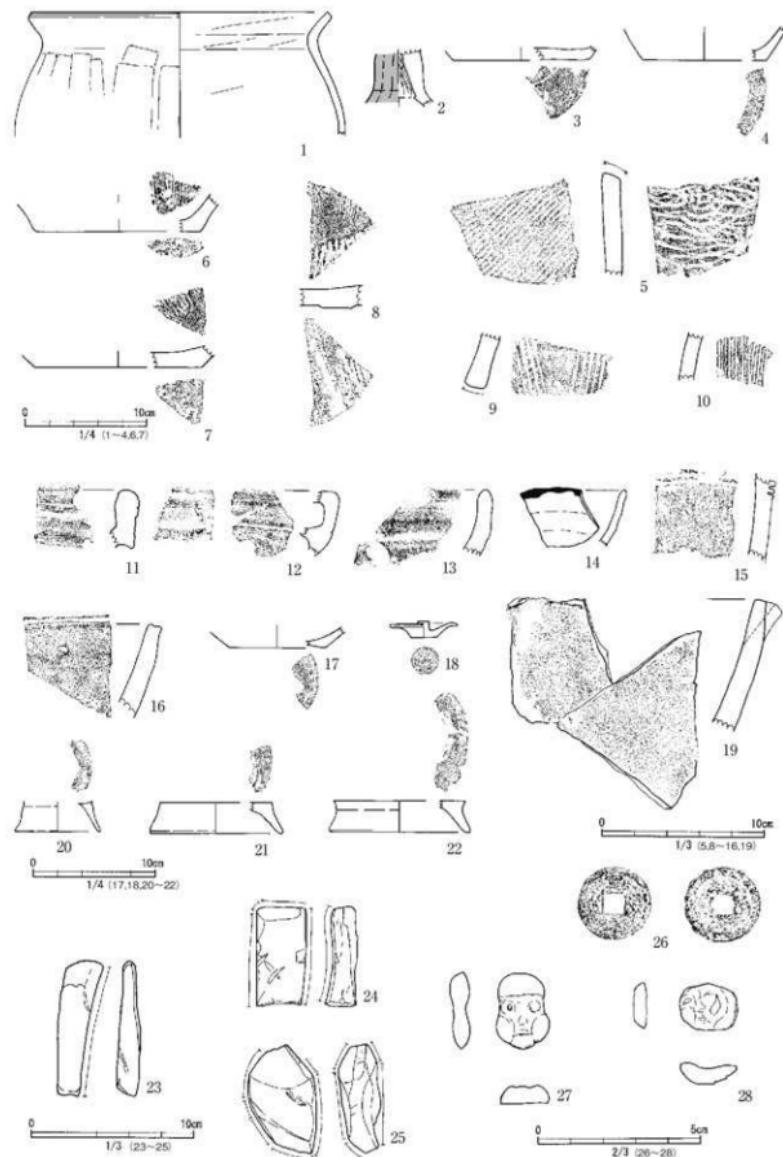
グリッドから出土した遺物はおおよそ以下のとおりである。土師器576点、須恵器4点、砥石5点、軽石3点、滑石の破片21点が出土していた。その他比較的新しいもので陶磁器類45点、すり鉢8点、土師質土器139点、銭貨1点、泥面子2点などであった。総数でおおよそ970点ほどである。

グリッドからの出土量は特に多くはないが、出土した遺物の中には縄文土器や弥生土器の出土が全く確認できなかった。一方、土師器が全体の6割近くを占めており、本跡の主要な時期といえる。内容的には大半が古墳時代中期・後期のもので、本跡で確認されている遺構の時期と同一であった。

土師器の出土状況は調査区全体からすると、東側半分からのみ出土する傾向がみられた。これは住居跡等の遺構が東側に検出していることと矛盾はしないし、本跡東側から台地先端にかけた区域が集落の中心となることからも当然のことと思われる。しかし、出土分布を詳細に見てみるとJ25・J25・J26グリッドに特に集中している状況がみられた。隣接して2号住居跡はあるものの、集中しているこれらのグリッドからは土坑が検出されているのみであり、住居跡と連動して土器の出土が増加しているのではなく、土坑との関係が大きいと考えられる。

陶磁器については時期を特定することはできなかったものの、土師質の土器が最も多く、すり鉢の出土





第23図 グリッド出土遺物

が多いことも特徴的であった。23図26は「寛永通宝」であり、磨耗が激しいが新寛永とみられる。同図27、28は「芥子面」と呼ばれる泥面で2点出土している。28は人の顔のようではあるが、何を表現しているものか不明である。横長で裏面の抉れが深い。これらは江戸後期に栄えた成田街道・大和田宿の中心区域に隣接して所在している本跡の特徴の一端を表しているとみられる。

第9表 グリッド出土遺物観察表

No.	種類	計測値 (cm)	表面の特徴	裏面・調整の特徴	施主・色調・焼成	備考	出土グリッド	整理No.
1	土師器 甕	口径 (24.4) 底径 — 最高 (10.3) 最大径 —	口縁から脚部までの1/2以上 底部 — 脚部は外傾する 上位に最大径	口縁から脚部までの1/2以上 底部で縁やかに屈曲 し、口部は外傾する 脚部 上位に最大径	細砂粒・やや多 内面に横ナデ 脚部から脚部 にかけて段位のヘラケズリ 内面 外) 柄 SYR7/6 内) 赤褐 10YR5/4 良好		I25, I26, 表採	031
2	土師器 高台	口径 — 底径 — 最高 (4.7)	脚部柱状ののみ残存	外側へラケズリ後、ナデ 内面は 脚の一部にナデ	細砂粒・少 内) 黄 7.5R4/6 内) にぶい黄褐 10YR6/4 良好	外側に全面赤芯	C27	022
3	土師器 甕	口径 — 底径 (11.1) 最高 —	底部1/5ほど残存	外側へラケズリ 内面へナラテ	細砂粒・少 内) にぶい黄褐 10YR6/3 内) にぶい黄褐 10YR7/4 良好		N17	023
4	土師器 甕	口径 — 底径 (10.2) 最高 —	底部1/6ほど残存	外側へラケズリ 内面へナラテ	細砂粒・少 内) 反黄褐 10YR6/2 内) にぶい黄褐 10YR6/4 良好		J26	024
5	須恵器 壺	口径 — 底径 — 最高 —	底部1/6ほど残存	外側面上のタキオキ 内面同心状のタキオキ	砂粒・少 内) 黄 7.5Y1/5 良好	破片割れ口及び内 面が擦られる 再 利用品か	I25	021
6	陶器 すり鉢	口径 — 底径 (13.5) 最高 —	底部1/6ほど残存	すり目がつぶれ、かなりの使用感 を感じさせる	白色太砂粒 多 外) にぶい赤褐 5YR5/4 内) 赤褐 2.5YR4/6 良好			030
7	陶器 すり鉢	口径 — 底径 (13.6) 最高 —	底部1/4ほど残存	砂粒・やや多 外) 岩崎灰青 10R2/2 底) 底赤 10R4/2 (内) 底赤 10R3/3 良好		グリッド出土一括		014
8	陶器	すり鉢	底部	白色砂粒・やや多 内) 砂岩青 7.5R3/3 良好	底) にぶい赤褐 7.5R4/3		G27	007
9	陶器	すり鉢	すり目消滅 破片の下部も赤ら に見える	細砂粒・極少 内) 黄褐 2.5YR3/3 良好			G29	013
10	陶器	すり鉢	中砂粒・まばら	外) 反赤 10R4/2 内) 岩崎青 10R3/2 良好			I25	009
11	陶器	すり鉢	口径	砂粒・少 外) 岩崎青 10R3/3 内) 岩崎青 10R5/3 良好			K25	016
12	土師質	埴輪	口径	砂粒・少 内) にぶい黄褐 10YR6/4 底) 岩崎 10YR4/1 良好			E27	003
13	土師質	埴輪	口径	金雲母・繊紗粒・やや多 外) 岩崎青 7.5YR1/1 内) 岩崎青 7.5YR5/2 良好			I24	017
14	土師質	灯明皿	口径	砂粒・少 内) 黄 7.5YR7/6 良好	口縁にスカスカ付着		F29	002
15	土師質	口縫付皿の破片、内側上端に突起あり 白色、金雲母等砂粒 多	内) にぶい橙 7.5YR7/3 内) にぶい赤 7.5YR7/3 内) にぶい黄 7.5YR7/3 内) にぶい青 7.5R5/3 良好	内側上端に突起あり 下には焼成前の穴孔		グリッド出土一括		019
16	陶器	跡か	底部	砂粒・少 外) 岩崎青 10R3/3 内) 岩崎青 10R5/3 良好	内) にぶい青 7.5YR7/3 良好	グリッド出土一括		020
17	陶器	皿	口径 — 底径 (7.8) 最高 (1.7)	底部1/4ほど残存	底面に凹凸あきり痕 内面粗	細砂粒・少 灰 2.5Y6/1 良好	F29	001
18	陶器	皿	口径 — 底径 2.2 最高 1.3 最大径 (5.6)	1/2ほど残存	口クロ成形 底面に凹凸あき れ	細砂粒・少 灰 2.5Y8/2 良好	J25	011
19	陶器	片口鉢		底部にタキオキ 後子字型 口を指標により成形、口縁ナダ	片 白色太砂粒 多 明赤赤 2.5YR5/6 良好		J22	015
20	土師質	高台	口径 — 底径 (7.0) 最高 (2.5)	高台部1/2ほど残存	口クロ成形 接合面に凹凸あき れ	砂粒・少 内) にぶい橙 7.5YR6/4 内) にぶい青 7.5YR6/3 良好	グリッド出土一括	006
21	土師質	高台	口径 — 底径 (11.0) 最高 (2.5)	高台部1/2ほど残存	口クロ成形 接合面に凹凸あき れ	砂粒・少 内) にぶい青 7.5YR7/3 内) 流赤 7.5YR8/4 良好	グリッド出土一括	010
22	土師質	高台	口径 — 底径 (11.6) 最高 (2.6)	高台部1/3ほど残存	口クロ成形 接合面に凹凸あき れ	砂粒・少 内外) 桃赤 7.5YR6/1 良好	グリッド出土一括	018
23	石器	磁石	長 <0.3cm> 高 <0.1cm>	幅 <1.4cm> 厚 1.4cm	重量 27.3 g		C27	026
24	石器	磁石	長 <0.1cm>	幅 3.1cm 厚 1.3cm	重量 51.5 g		E24	028
25	石器	磁石	長 6.7cm	幅 4.2cm 厚 2.4cm	重量 68.9 g		J25	027
26	瓦質	寛永通宝	底 1.3cm	幅 —	重量 2.1 g	新寛永	E27	029
27	土製品	泥面子	高 2.3cm	幅 1.6cm 厚 0.6cm		模 SYR7/6 砂粒・少	J25	004
28	土製品	泥面子	高 1.4cm	幅 1.8cm 厚 0.4cm		模 SYR6/8 砂粒・少	J25	005

## 第三章 まとめ

### 調査の成果

小板橋遺跡b地点の調査によって検出された遺構は、古墳時代の堅穴住居跡が2軒、土坑4基、溝状遺構1条であった。また、調査によって確認できた出土遺物では、縄文土器や弥生土器は全く検出されず、古墳時代の土師器が大半を占めていた。しかし、総量としてはあまり多いとはいえない。また、すり鉢や土師質の土器なども含めて、近世・近代と推定される陶磁器類が比較的多く出土している。本跡の立地が江戸後期に栄えた成田街道・大和田宿に隣接していることとの関連とみられる。しかし、残念ながら宿場町の姿を物語る遺構は検出されていない。

遺構から出土した完形遺物は、1号住居跡を除いてほとんど出土していない。その1号住居跡でも実測の可能ななもので8点ほどしかない状況であった。1号住居跡からは壺が3点、壺・甕の半完形が4点であった。壺は古墳時代中期からの系統を引く丸底のものであった。須恵器模倣壺は出土遺物の中には、破片としてもみられなかった。2号住居跡の唯一の実測土器も丸底の壺である点もほぼ同様の時期を表しているように推測できる。これらのことから、住居跡の時期を中期末から後期初頭とする。

本調査区では住居跡が2軒しか検出されていないが、1軒の住居跡(1号住居跡)から滑石製模造品を製作したと推定される滑石の破片が多量に出土している。製品はほとんど検出されていないが、製作途中のものを見ると、白玉に関するものしか確認できなかった。この住居跡には炉とカマドの両方が付設されており、炉からカマドへの移行期の姿といえるのかもしれない。

一方、グリッドから出土した土師器の出土量もそれほど多くはないが、調査区の東側の一区画に集中していた。隣接するグリッドに住居跡(2号住居跡)が検出されてはいるが、2号土坑周辺に集中する傾向が確認された。この2号土坑は主体となる約4m×2.4mの浅い土坑とその周辺の19ヶ所の小ビットからなっており、土坑の周辺及び内部から多量の白色粘土の混入が確認されている。また、周辺には底面が焼土化し、焼土が多量に堆積する。径が1.4mほどの皿状の土坑(1号土坑)や西に30mほど離れたところには白色粘土層まで掘り下げた土坑(3号土坑)が検出されていた。また、1号土坑の出土遺物には底部の破片で糸切痕が上面と下面の両面に残るものがあり、土器製作途中のものであろうか。これらの状況を考慮すると、土器等の製作に関連した遺構群の可能性もあるのではないだろうか。土坑相互の関連を詳細に検討していく必要がある。

### 小板橋遺跡a地点の概要

現在、a地点の具体的な内容が報告されていない状況では、b地点だけの内容で本跡の全体像を理解するのが困難であるため、手元にある資料からa地点の概要をまとめる。

a地点の調査は、大和田字中畠ヶ166-1他5,379.55m<sup>2</sup>の区域に対して、昭和55年7月21日から8月13日の期間に調査が実施された。終了届によると古墳時代・中期(和泉期)の堅穴住居跡7軒、同期溝1条、後期(鬼高期)の堅穴住居跡6軒、同期のビット1基、時期不明の堅穴住居跡2軒が検出されている。遺物は同時期の完形80個体、滑石製模造品等約200点(白玉・双孔円板・劍形品・紡錘車・勾玉・碎片など)、土玉、鉄製品などが出土していると報告されている。このような内容で本跡が石製模造品の製作跡として理解されてきた概要であった。



1. 調査前状況



2. 確認調査トレンチ掘削状況



3. 確認調査トレンチ掘削状況



4. 本調査作業状況(1)



5. 本調査作業状況(2)



6. 本調査作業状況(3)



7. 本調査作業状況(4)



8. 調査完了状況

図版2



1. 1号住居跡全景



2. 1号住居跡遺物出土状況

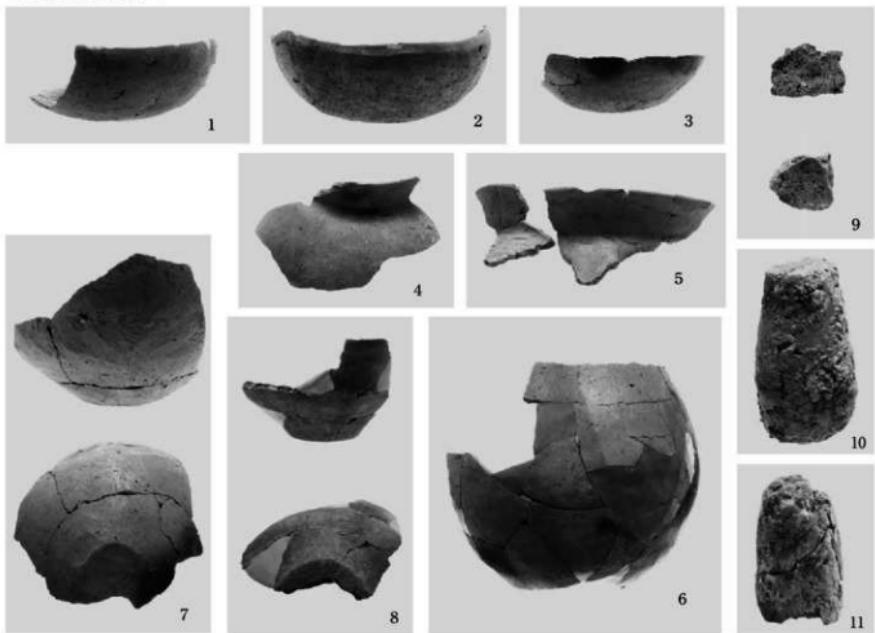


3. 1号住居跡土層

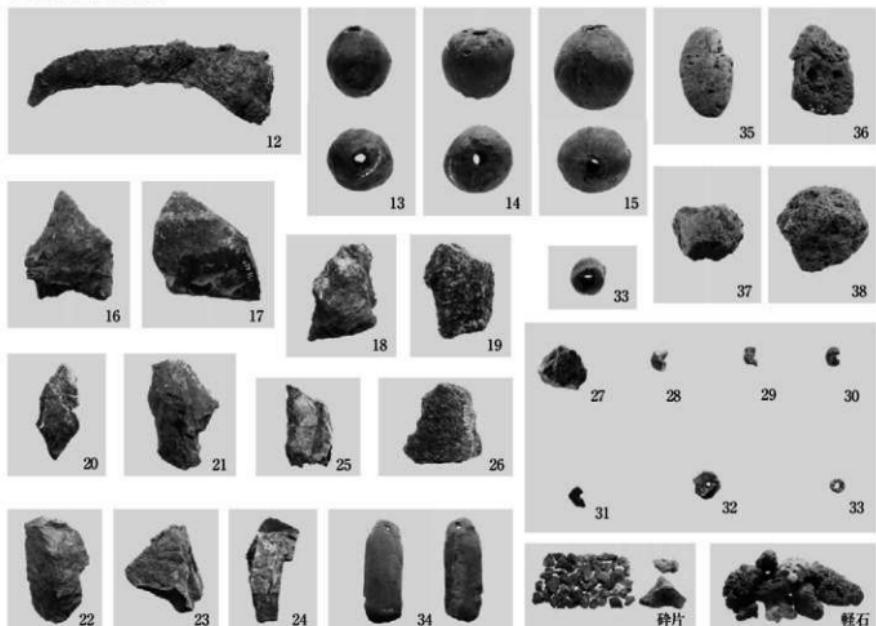


4. 1号住居跡カマド

1号住居跡出土遺物(1)



1号住居跡出土遺物(2)



1. 2号住居跡全景

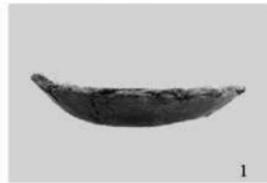


2. 2号住居跡遺物出土状況



3. 2号住居跡土層

2号住居跡出土遺物



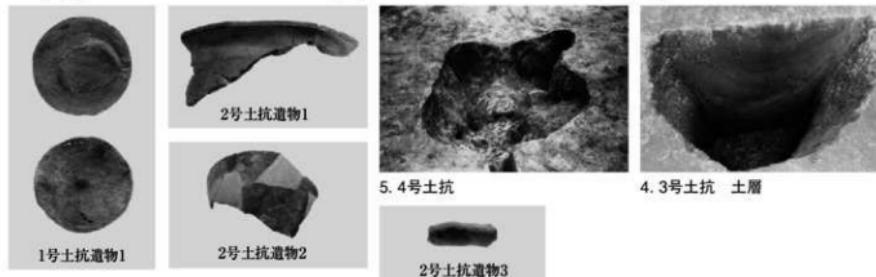
図版4



1. 1号土抗

2. 2号土抗

3. 3号土抗



グリッド出土遺物



19

23

24

25

27

28

# 報告書抄録

ふりがな 書名	ちばけんやちよし こいたばしいせき 千葉県八千代市 小板橋遺跡						
副書名	b 地点埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	秋山利光						
編集機関	八千代市遺跡調査会						
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL 047(483)1151 内6114						
発行年月日	西暦 2008年(平成20年)3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
小板橋遺跡	八千代市大和田字中畑 中畑ヶ165-1ほか	12221 245	35度 42分 48秒	140度 06分 38秒	確認調査 19840820~ 19840829 本調査 19840905~ 19841031	確認調査 394 m <sup>2</sup> / 3,400 m <sup>2</sup> 3,400 m <sup>2</sup> 1,536 m <sup>2</sup>	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小板橋遺跡	集落跡	古墳時代 中期末~後期初	古墳時代 中期末~後期初 堅穴住居跡 2軒 内1軒石製模造品製作跡 土坑 4基 近世以降 なし	古墳時代 土師器 中期末~後期初 鉄器(鎌)・土玉・砥石 白玉・白玉未製品・滑石 片等 近世以降 陶磁器・搖鉢 泥面子・寛永通宝			
要約	<p>小板橋遺跡は印旛沼水系の新川流域の西岸に位置している。標高23m前後の下総下位面の形成する台地上に立地する。</p> <p>調査区の主要な時期は、古墳時代中期末から後期初頭にかけて宮喰された集落の一部である。調査区では2軒の堅穴住居跡が検出されているが、調査区の東側に遺構や遺物が集中し、集落の西端に位置するとみられる。</p> <p>1軒の住居跡から多量の滑石の破片や作成中の模造品などが出土しており、石製模造品製作跡とみられる。</p> <p>不整形な土坑の周囲に多くの土師器片が出土している。この土坑の周囲には底面が焼土化された皿状の土坑や、2mほど掘り込み、白色粘土層にまで達する断面フラスコ状の土坑なども検出されており、土器製作などの機能を有していた可能性もある。</p> <p>本跡は江戸期の大和田宿の隣接地であり、遺物も多少出土しているが、当時の宿場町の姿を物語る遺構は検出されていない。</p>						

## 千葉県八千代市 小板橋遺跡 —b 地点埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成20年3月31日発行

編集 八千代市遺跡調査会

八千代市教育委員会 社会教育課内

千葉県八千代市大和田138-2

発行 中島土地建物株式会社

印刷 金子印刷企画

千葉県八千代市萱田410-1